



Title	視座を俯瞰した認知的メタ形而上学の試み : 構成のアンチノミーをめぐって
Author(s)	山泉, 実
Citation	EX ORIENTE. 2023, 27, p. 51-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91319
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

◎論文

視座を俯瞰した認知的メタ形而上学の試み

——構成のアンチノミーをめぐる——

山泉 実

キーワード：視座俯瞰認知メタ形而上学、構成のアンチノミー、認知形而上学、指示参照ファイル理論

1. はじめに

本稿では、形而上学の問題である構成のアンチノミー（コニー&サイダー 2005/2009: 7章、倉田 2017: 第一講義）を、視座俯瞰認知メタ形而上学（perspectival cognitive metametaphysics）の観点から論じる。視座俯瞰認知メタ形而上学とは、指示参照ファイル理論（Reference File Theory、以下 RFT。山泉 2020a、2021a、2021b、2022、近刊、Yamaizumi 2019）およびそれと対になる認知形而上学（ジャッケンドフ 2012/2019、山泉 2020b）の応用である。以下ではまず、コニー&サイダー（2005/2009）に従って、構成のアンチノミーを、その背後にある4つの想定と共に導入する。続いて、分析の枠組である RFT・認知形而上学と視座俯瞰認知メタ形而上学を簡単に紹介し、構成のアンチノミーが RFT・認知形而上学からは（非メタ的に）どう捉えられるかを述べる。そして、その視座から構成のアンチノミーをめぐる諸説をメタ的に検討し、それらの問題点とアンチノミーがなぜパラドキシカルに感じられるかの説明を試みる。この視座俯瞰認知メタ形而上学的考察が本稿の中心となる。以上

を通して、視座俯瞰認知メタ形而上学とその基盤となる RFT・認知形而上学の有効性を示し、それと同時に、我々が物質の対象をどのように概念化しているかの理解を深めることを目的とする。

2. 構成のアンチノミーとは

構成のアンチノミーとは、モノとその構成要素についてのもので、コニー&サイダー（2005/2009）は7章の主題として次のように導入している。

物質の対象——冷蔵庫の氷、ソーダが入っている缶、粘土の像など——をひとつだけ握りしめるのは不可能だ。なぜなら、ひとつしかないように見えても、実際には必ず二つあるからだ。（p. 195）

彫刻家はひとつかたまりの粘土を手にとった。これは一個目の対象だ。それから彼女は新しい対象、つまり、像を作った。これは二個目の対象だ。よって、彼女が像を作り終わった後には二つの対象、つまり、像とひとつかたまりの粘土を握りしめているのである。ひとつのように見えるだけで、ほんとうは二つあるのだ。

像と粘土は別個の対象である。これがこの推理の結論だ。（pp. 196-197）

そして、コニー&サイダーは構成のアンチノミーを次のように分解している（pp. 198-199）。

1. 創造テーゼ：彫刻家はほんとうに像を作った——つまり、像は彫刻家が制作する以前には存在していなかった。
2. 持続テーゼ：彫刻家がひとつかたまりの粘土を像の形にしても、それによって粘土が破壊されることはない。
3. 存在テーゼ：像と粘土はほんとうに存在する。
4. 不合理テーゼ：別個の対象が、ひとつの時点において、ひとつの物質と

ひとつの場所を共有することは不可能である。

以下では、コニー&サイダーと同様に粘土像を主たる例として取り上げる。この例自体は、Gibbard（1975）など古くから用いられているものである。

3. 枠組みの導入とそれによる構成のアンチノミーの分析

本稿は、構成のアンチノミーの諸説を認知的視座（cognitive perspective、ジャッケンドフ 2012/2019）からメタ的に分析するという意味で、視座俯瞰認知メタ形而上学の試みである。以下、それを敷衍する。

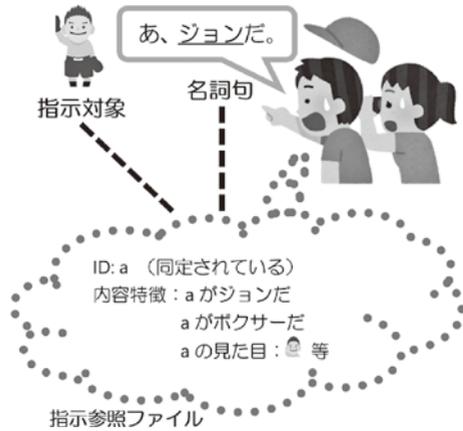
3.1 認知的視座

人間がものを考える際、常に何らかの視座を採っている。認知的視座とは、心が関わる現象を考える際に、心の働きに即して理解しようとする見方である。頭で起こっていることには脳神経細胞の活動というハードウェアの側面と情報処理というソフトウェアの側面があり、どちらも広い意味では認知と言えるが、前者に即して理解しようとする見方を神経視座（neural perspective、同書）と言う。本稿で採用するのは、後者に即して理解しようとする見方、狭義の認知的視座で、「機能的視座」（同書）ともいう。理論言語学では、生成文法も認知言語学も、詳細は違えど狭義の認知的視座を採っていると見える。

3.2 指示参照ファイル理論（RFT）

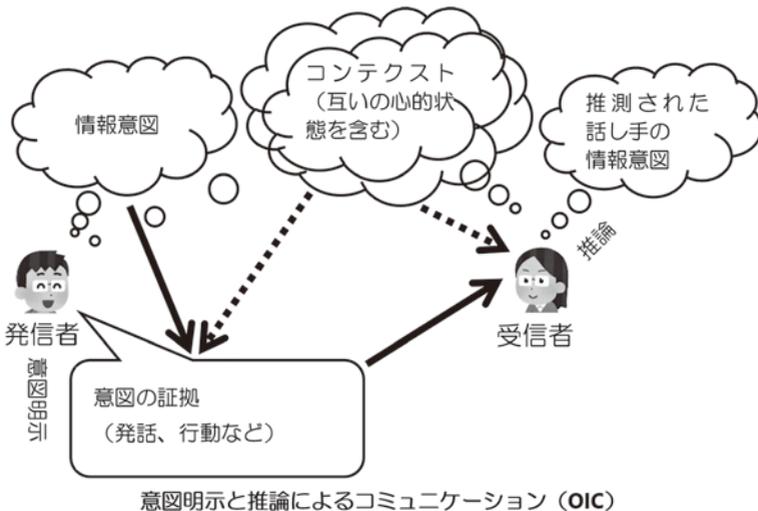
RFT は、指示参照ファイル（reference file、以下 RF。同書）という概念を鍵として、認知的視座から名詞句の意味やそれによる指示の問題を解き明かそうとする理論である。以下、一部山泉（2021b）等の繰り返しになってしまうが、簡単に理論を紹介する（詳しくは、山泉 2020a、2021b、山泉 2022 を参照）。RFT の概念的基盤はジャッケンドフ（2012/2019 等）の概念主義の意味観である。語用論的指示が起こるには、名詞句と指示対象を言語使用者の

心的表象が仲介する必要がある。たとえば、ジョンを見つけ「あ、ジョンだ」と言ったとき、名詞句「ジョン」と指示対象のジョンは、指示対象に対応する心的表象を介して指示という関係をつぶ。その心的表象をRFと言う（右図）。ただこれは、認知的視座が徹底されていない言い方で、ジャッケンドフ（2002/2006: 10.4）は、指示を考



える際にこの視座を貫徹し、「世界」を心の中に押しこめる」。つまり、指示対象は客観的実世界にあるのではなく、言語使用者によって概念化された世界にあるとする。RFTでもこのように考える。

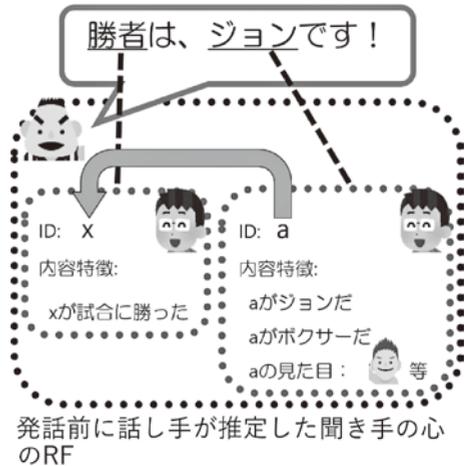
RFT のもう 1 つの基盤は、関連性理論に基づく言語進化論（スコット＝フィ



リップス 2015/2021) である。これによると、言語は、人間だけができる意図明示—推論伝達 (Ostensive-Inferential Communication、以下 OIC) を強化することを機能として進化した。OIC とは、関連性理論の主張するコミュニケーションの方法で、発信者は、情報意図の証拠を提示し、証拠に気付いた受信者は発信者の意図を推測する (上図)。

OIC は常に心の読み合いを伴うが、会釈や含み笑いだけでも OIC が成り立つことから分かるように、言語は必須ではない。OIC が言語に先立って進化したのである。言語は OIC をより汎用的・効率的・正確にすることを機能として進化したため、言語は OIC のために最適化されているはずで、その一部である名詞句の意味も OIC に最適化されていると考えられる。そこで、名詞句の (話し手の) 意味とは話し手が推測した聞き手の心における RF (又はその一部) であるという可能性を RFT は追求する。話し手は聞き手の心的状態を常に推測しているからである。

例えば、ボクシングの試合の判定における「勝者はジョンです」という宣言の名詞句「ジョン」と「勝者」の意味は何かというと、それぞれ、ジョンに対応する RF と勝者に対応する RF (どちらも話し手 (レフリー) が聞き手 (観客) の心にあると推定している) である。観客は勝者を同定できていないため、その ID は自由変項 x で、この点、聞き手の心にあるジョン RF (ID は定項 a) と異なる。聞き手は、右図に示すように、両名詞句をそれぞれのファイルに対応させ、 x を a で埋めることで両ファイルを統合し、この発話から効率よく知識を改善できる。



3.3 認知形而上学と概念世界の対象のモデルとしてのRFのデータ構造

意味論は、言語と世界の間を扱うならば、世界がどのようなものであるかを探求する何らかの形而上学理論と対になる必要がある。RFTと対になるのは、概念世界がどのようなものであるのかを探求する認知形而上学（ジャッケンドフ 2012/2019: 29章、31章他）である。認知形而上学も世界を頭の中に押し込め、我々は世界を認知によって構造化し、概念化した結果としての世界（概念世界）に生きていると考える。認知形而上学は、「私たちは形而上学的な問いを発するとき、何について話しているのか」というメタ形而上学の問いに対して、実在についてであると答える実在論の立場とも、単に私たちが実在について語る仕方についてであると答えるデフレーション論の立場とも異なる。第三の立場、「認知的立場」では、「人が世界をどう理解するか、人の心はどのような種類の存在物を世界に登場させているか」について話していると答える（ジャッケンドフ 2012/2019: 209）¹。問題となっているのは、語り方や言語表現自体ではなく、その背後にある概念化と視座であると考えられる。この立場の認知形而上学に立脚するRFTにおいては、概念世界の1つの対象が1つのRFに相当し、RFに相当するものは、たとえ実在しなくても、対象である。逆に、実在しても概念化者が知らず、相当するRFを構築しえないのであれば、その概念化者にとって対象は存在しない。RFTでは、RFに相当するということは、1つの意味で存在する（≠実在する）ということを保証する。

RFは以下の4つの素性を持つ。これらは我々が世界の対象をどのように概念化しているかを捉えたもので、認知形而上学における対象のモデルである。これらによって名詞句の意味の多様性も捉えられる。

1. 存在論的範疇ONT この素性は、モノ、コト、人など、RFに対応する対象の存在論的範疇を表す。本稿で問題となるのはほぼ全てモノである。タイプ・トークンの区別がある範疇においては、[± token]によってそれを表す。距離のようにこの区別を持たない範疇は、RFの部分構造（特に後述の[特質：値]）を成し、RF全体には対応しない。人や情報のようにドット事物（ジャッケンドフ 2002/2006: 11.10）になり得る存在論的範疇もある（本稿4.

1、4.3.3 参照)。

II. ID RF はワーキングメモリにその都度作られては消える。対応する対象についての知識が全部それに入っているわけではなく、その場で活性化しているものだけが含まれる。そのため、たとえば昨日太郎を哲学者として絶賛したときに太郎に対応した RF と、今日太郎を父親として貶したときに太郎に対応した RF が同じ対象に対応するものであるということを保証する必要がある。それをするのが ID である。ID には以下の 4 種類がある。

a, b, … : 同定されている対象に対応する RF が持つ定項。

x, y, … : 未決定の勝者や探しているジグソーパズルのピースのような未同定の対象の RF が持つ自由変項。

φ, ψ, \dots : 存在しないと分かった対象に対応する RF が持つ null 値。

α, β, \dots : 叙述名詞句に対応する RF が持つ束縛変項。これは述語付けされる名詞句に対応する RF の ID によって束縛される。

以下で取り上げるものは基本的に、対象が同定されている（と概念化者が判断する）場合に RF に与えられる定項である。

論述において RF はその ID の値によって代表される。

III. 位置付け (@) 人間は、自分が現実世界の実態と考えるもの以外の世界も理解できる。他人の心、フィクション、願望などである。RF がこのようないわば有標の世界に位置付けられることを示すため、@以下に位置付けを明記する。以下で問題となるのは、構成のアンチノミーを論じるにあたって（議論の都合上仮想的に）現実世界の実態とみなされる世界である。また、次に述べる内容特徴ごとに@が必要になることもあり、内容特徴ごとの@によって RFT は時間に相対化された性質（倉田 2017: 18）を扱うことができる。

IV. 内容特徴 対象についての個別的知識のうち、活性化してワーキングメモリにあるものである。①記述：例 〈a が像である〉〈a が粘土のかたまりである〉、②特質—値：例 [重さ：20kg]、関係性—リンク先：例 《父親：小泉純一郎》の 3 種類がある²。知識の更新とともに内容特徴には増減がある。内容特徴がいくら変わっても、ID の値が同じ定項の RF に対応する以上は同じ対

象とみなされる。

以上4つの素性に対応する認知形而上学の分野が考えられる。存在論的範疇には認知存在論、IDには同一性についての認知形而上学、位置付けには様相についての認知形而上学、内容特徴には因果・変化などについての認知形而上学が対応する。

また、このデータ構造によって人間の理解する存在・非存在の様々な様態を無理に一元化することなく捉えられる。まず、ある対象に対応するRFを（記憶の呼び出しなどによって）心に構築できるかどうか、その心の持ち主にとって対象が存在し得るかどうかに対応する。存在論的範疇に関して言うと、距離のような[± token]の区別がなく、通常RFに対応しないものは、人や場所のように独立した存在ではない。IDについて言うと、「100mを3秒で走れる人はいない」という発話を理解した後でその主語名詞句に対応するRFのように、IDがnull値になったRFに対応する対象は、別の意味で存在しない。位置付けについて言うと、シャーロック・ホームズのように、概念化者にとっての現実世界の事態に位置付けられないRFに対応する架空の対象は、また別の意味で存在しない。また、このように様々な意味の存在する・しないにメタ的に言及する場合は、〈□が存在する (or しない)〉という内容特徴がRFに入ることになる。

RFは対象を視覚的に認識・追跡する際など、言語による指示以外にも使われていると考えられる。RFのある概念構造は、言語そのもの（音韻構造・統語構造とそれらを一端とするインタフェース、Culicover and Jackendoff 2005: 20）の一部ではなく、進化的にもそれに先行するものである（詳しくは、山泉 2020a）。そのため、RFT・認知形而上学は、元々言語学の問題に対処するために生まれたものだが、適用範囲は言語の分析にとどまらず、形而上学の問題に適用することもできる。構成のアンチノミーはその一例である。なお、認知形而上学には、世界の概念化の可能性を探求する一般認知形而上学と、世界の概念化の可能性のうち、何らかの場合に採用されるものを探求する特殊認知形而上学があり、日常言語を扱う意味論と対になるのは、平生の日常的視座に

において世界と捉えられているものを探求する特殊認知形而上学である（山泉 2020b）。以下でも RFT で構成のアンチノミーを分析する際の認知形而上学として、日常的視座を扱う特殊認知形而上学が前提とされている。

3.4 4つのテーゼの認知形而上学的検討

次節のメタ的考察に先立って、構成のアンチノミーの背後にある4つのテーゼを認知的視座に立つ RFT・認知形而上学の立場から非メタ的に検討しておこう。認知形而上学が問題とするのは概念世界であるから、テーゼのそれぞれの最後に、「…と認識される」のような表現が付いているものを検討しているということになる。

まず、持続テーゼ「彫刻家がひとかたまりの粘土を像の形にしても、それによって粘土が破壊されることはない」は、RFT・認知形而上学の観点からも問題ない。粘土を像の形にしたとき、素材が粘土でなくなるわけではないから、像ができて RF に内容特徴〈a が像である〉が加わるだけで、〈a が粘土のかたまりである〉が失われるわけではないのである。

次に、不合理テーゼ「別個の対象が、ひとつの時点において、ひとつの物質とひとつの場所を共有することは不可能である」は、少なくとも固体のモノに関しては RFT・認知形而上学の観点からも問題ない。存在論的範疇がモノの RF に対応する対象2つが、一時点において、1つの物質と1つの場所を共有することは不可能であるというのが我々の現実世界の実態の理解だと考えられるからである。

創造テーゼと存在テーゼは慎重に解釈しなければならない。まず、創造テーゼから吟味しよう。「彫刻家はほんとうに像を作った——つまり、像は彫刻家が制作する以前には存在していなかった」(p. 199)、「像が存在しはじめるのは、彫刻家が粘土を像の形にしたときだけである」(p. 199)と言われているものの、像であるということは RF の内容特徴〈a が像である〉であり、粘土だったとき既にそれを概念化していた人にとっては、彫刻家が像を制作したときに RF が増えたわけではない。このテーゼにおける「存在しはじめる」とい

うことは、RFTにおいては、内容特徴の追加であり、新たなIDのRFの構築ではない。対象が「像」と呼ばれるのは像の形ができたときからであるのが普通である。しかし、その対象が存在しはじめるのは、その時からではないということになる。そう呼べるならその対象はあるとは言えても、そう呼べない場合に対象が存在しないということは必ずしも成り立たない。しかし、言語に引きずられると、そう考えてしまいかねない。粘土のかたまりを像の形にして像を作るということは、2個目のRFに対応する対象を作ったことではなく、既存のRFに内容特徴が追加されるきっかけを作ったということにすぎない。RFTの立場から言うと、構成のアンチノミーをめぐる最大の混乱の原因はRFの内容特徴と、IDによって同一性を保証されるRF自体を区別していないことである。つまり、間違いの元は、あるものを「像」と呼べるようになることをもって、像であることが本質であるもの—それが成り立たなくなったら存在が失われるもの—が存在するようになることを考えることである。

存在テーゼ「像と粘土はほんとうに存在する」について言うべきことの多くは、既に上で述べた。「像」と言われる対象に対応するRFがあるならば、その対象は存在し、かつ、そのRFに内容特徴〈aが像だ〉が入っている。「粘土」と言われる対象も、対応するRFがあるのなら存在し、そのRFに内容特徴〈aが粘土だ〉が入る。どちらも同じIDのRFに対応するなら、「どちらもまったく同じ場所に位置している。また、どちらも同じひとつの物質からできている。さらに、このことは、どちらもまったく同じ大きさ・形・重さ・色・質感をしている」(p. 197)ということになる。もっとも、像と粘土をこの引用の直前にあるように「この二つの対象」と呼ぶのは適切ではない。

像が作られた場合だけでなく、像が破壊された場合も検討しておこう。コニー&サイダーは次のように述べている。

もし像のできばえに不満があれば、彫刻家はこの像をぐしゃっつつぶしてしまえる。すると、この像は壊れてなくなってしまう。だが、粘土はなくなるならない。よって、このひとかたまりの粘土は像と同一ではない。このひ

とかたまりの粘土は像が存在する前から存在し、像が存在しなくなった後も存在し続けるからだ。(p. 196)

問題の RF に〈a が像だ〉という内容特徴（@現実の実態）が入っているのは、対象が像の形をしている間だけであり、形が変わったら内容特徴はなくなる（あるいは、内容特徴の@の値が過去に変わる）。それでも RF は ID が同じ a のまま RF は存続する。対象が同一性を保ちつつ存在するという点では、ひとつかたまりの粘土と像は、同じ ID の RF にあてはまる特徴であるという点では、同一と言えなくはないけれども、内容特徴の存続と RF の存続は全くの別問題である。

RFT・認知形而上学は以上のように考えることで、構成のアンチノミーの問題を解消できる。それだけでなく、構成のアンチノミーをめぐる形而上学の諸説を、それらの視座を俯瞰してメタ的に検討することができる。

4. 諸説の視座俯瞰認知メタ形而上学的検討

認知的視座をとる RFT・認知形而上学にとっては、全ての言明の背後には概念化と視座があることが自明である。形而上学的言明も例外ではない。形而上学的論争は、ときにただの言葉の使い方の対立と受け取られるが（Balcerak Jackson 2020）、認知的視座からは、むしろ言葉の背後にある概念化や視座の対立ということになる。認知的視座は、対立する形而上学説の背後にある複数の概念化と視座がただ併存すると考える単なる相対主義ではない。前述の RF とそのデータ構造は人間に共通した概念化の記述の基礎を提供するから、少なくとも名詞句による表現については、対象をどのように概念化しているのかを捉えることができる（名詞句以外についても、RFT のような枠組みができればそれが可能になる）。そのため、RFT・認知形而上学の観点から、様々な形而上学の説がどのような概念化に基づくのかをメタ的に分析・比較できる。諸説の違いは、それぞれの説が内的整合性を持つのであれば、基本的に視座の違い

に由来すると考えられる。このような「視座俯瞰認知メタ形而上学」と呼ぶべき立場からの分析によって、諸説は統一的な視座からよりよく理解できるようになることが期待される。

以下では、視座俯瞰認知メタ形而上学の立場から、コニー&サイダー(2005/2009)が提示している構成のアンチノミーをめぐる諸説を取り上げる。上述のRFT・認知形而上学の分析とは異なるものであるため、やや批判的に検討することになる。4.1-4の説はそれぞれ構成のアンチノミーを構成する否定しがたい前提1-3を否定するか、受け入れがたい結論4を受け入れるものである。コニー&サイダーが擁護するのは第4の説を改訂した第5のものである。

我々は5つの説と同じ土俵には乗らずにメタな立場から論評しているということに留意されたい。これらは全て実在がどうなっているかを問題にしているものである。一方、認知形而上学は、我々が実在をどのようなものと理解しているかを問題にし、言語の観察と言語に頼った推論だけからわかるのは、どこまでいっても概念世界についてのことであろうという立場をとる³。

4.1 物質だけ説

1つ目の物質だけ説は創造テーゼを否定し、次のように主張する。「存在するのは物質のかたまりだけだ。物質のかたまりがどういうものかは、それを成している物質によって決まる」(コニー&サイダー 2005/2009: 200)。この主張をRFT流に解釈すると、対象の同一性は、〈aは粘土だ〉のような、対象を形成する物質に関する内容特徴が決めることになってしまう。これは、通常の人間の概念化ではなく、物質だけ説は、その点で直観に反するものになる。

物質だけ説からは、彫刻家が何かを作っているということはない、ということが帰結する。RFTは、この“衝撃的”帰結が一見正しく感じられる理由を説明できる。RFTによると、彫刻家がこの意味で何かを作っていると言えるかどうかは、彫刻家の行為によって概念化者の心に新規IDのRFができるかどうか次第だが、それは概念化次第である。像の件に関して、RFができた

きにそれが単なる粘土の塊なのか像なのかは概念化のタイミングによる。彫刻家が像を作るのをずっと見ていた人にとっては、彫刻家が粘土の塊から像を作ったとき、粘土の塊 RF が既にある、RF が増えるわけではない。したがって、彫刻家はその人にとってその意味では何も作っていない。コニー & サイダーが構成のアンチノミーを導入したときも同様で、「彫刻家はひとかたまりの粘土を手にとった。これは一個目の対象だ」とまず述べてしまったら、名詞句「ひとかたまりの粘土」に対応する粘土の RF が先にできるため、彫刻家はその粘土を成形したと聞いても対象 /RF が新たにできることはない。一方、まず完成品の像を見た人にとっては、それに対応する RF には内容特徴〈a が像だ〉が最初から含まれている。この場合、そのような内容特徴を持った RF は彫刻家の関与があっても可能になるのであるから、その対象を彫刻家で作ったという概念化がされやすいだろう。そのため、創造テーゼ「彫刻家はほんとうに像を作った——つまり、像は彫刻家が制作する以前には存在していなかった」が否定されることは衝撃的であり得る。

次の帰結は、より衝撃的かもしれない。

冷凍庫のトレイで水を凍らせたり [...] すると、氷 [...] が作られるとふつうは考えられている。だが、物質だけ説はこのことを否定するのだ。物質だけ説によれば、あなたのドリンクに入っている氷は、氷と呼ばれることはなかったけれども、凍らされる前から存在していた。(p. 200、強調原文)

ここで述べられている仮想の製氷の場合は、像の制作よりも RF の連続性を想定しづらいため、氷が作られたと感じられやすい。1 つには、水は凍るとき冷凍庫の中で隠されていて、知覚的な連続性が想定しにくいからであろう。また、見えなくなっている間に物質の相が液体から固体へと変わること、マスから個体へという大きな変化もある。さらに、水を製氷皿に注ぐことによって、1 まとまりのマスが多数に分離するということが起こっている。これらの

ことがあるため、元の水 RF を 1 つ 1 つの氷の RF まで分裂させつつ連続性を保つことは、可能だけれども多大な認知的コストがかかり⁴、しかも特にそれに見合った認知効果は得られない。そのため、普通はそのようなことをしないだろう。認知システムは無駄なことをしないように進化しているからである。そのため、物質だけ説が至るそのような帰結は、理解はできるけれども衝撃的なのである。

RF の分裂という点でさらに認知的コストがかかる概念化を求められるのが次の帰結である。

大破した車が廃車場へと牽引されている。この車はそこでつぶされ、解体され、スクラップとして売られる。こうしてこの車は破壊される。違うだろうか？ 物質だけ説によれば、これは誤りなのだ！ 以前に「車」と呼ばれていたひとかたまりの物質が単にばらばらになっただけだ。それに含まれていた金属は（プラスチックとゴムも）様々な人に売られてしまったせいであちこちに散らばってしまったが、どれもまだ存在している。これらの物質そのものはどれもまったく破壊されていないので、元のひとかたまりの物質はまだ存在している。(p. 201)

ひとかたまりの物質がバラバラになったということも、RF の分裂によって同一性を保ったまま概念化できなくはない。同一性を保ったまま概念化すれば、「かつて「車」と呼ばれていた対象はまだ存在している」(p. 201) と考えることになる。もっとも、上の場合は、車の性質（機能など）が大きく失われているので RF を引き継ぐ動機に欠けるため、普通そのような概念化はされない。

これで最後だが、次の帰結は普通の人にとってさらに認知的コストが無駄にかかる。

かつてソクラテスを成していた物質は、いまでは地球上で散り散りばらばらになっている。[...] これらの物質そのものはどれも消滅していない。

よって、物質だけ説によれば、ソクラテスはいまでも存在しているのである。正確に言うと、かつて「ソクラテス」と呼ばれていた対象がいまでも存在しているのだ。(p. 201)

引用の最後の部分は、ソクラテス RF から同一性を保ちつつ分裂した無数の RF が@現実の実態（と想定される世界）において存続すると想定できるということを行っている。そのような概念化は論理的に不可能ではないから、物質だけ説の帰結としてはあり得る。しかし、このような概念化をするには、車の事例よりも多くの RF への ID を引き継いだ分裂が必要になり、より多くの認知的コストがかかる。（実際には、本当にそのような認知的操作が行われるというよりは、そのような認知的操作が行われることを想像して、認知的コストがかかりそうだと我々は想像するのだろう。）

さらに、ソクラテス RF は人という存在論的範疇の値を持つ。人は日常的視座の概念化においてモノ・心のドット事物（ジャッケンドフ 2002/2006）で、モノと心で別々の ID を持ち得る。そう考えることで、輪廻転生、変身、身体交換、憑依のようなことがどう概念化されるかが捉えられる（ジャッケンドフ 2012/2019: 31 章）。上の議論はそのモノの側面だけに注目している。上の引用に続いて、「もはや人の形をしていないので、それを「ソクラテス」とか、ある「人」とは呼べない」（コニー&サイダー 2005/2009: 201）と言われているが、形だけの問題ではない。ソクラテスの死後は、死体 RF の存在論的範疇の値に心がなく、その点で連続性がないこともそう呼びにくい理由である。

以上で検討した物質だけ説は一種の物理的視座であり、唯物論的立場に立つ者にとっては、幾らかの説得力を持つ。「最終的には、物質だけ説が主張するような奇妙なことを受け入れるべきなのかもしれない」（p. 202）とまで言われているのはそのためだろう。しかし、日常的視座からはかけ離れたものであり、その点で反直観的なものであることは言うまでもない。

4.2 ニヒリズム

物質だけ説をある面でさらに徹底したのが、コニー&サイダーがニヒリズムと呼ぶ説である。この説は存在テーゼ（「像と粘土はほんとうに存在する」）を否定する。そうしたら、創造テーゼも持続テーゼも成り立たなくなるだろうし、当然、構成のアンチノミーの結論も成り立たない。ここでいうニヒリズムは、何も存在しないとまでは言っていない。何も存在しないという説はコニー&サイダーが「絶対的ニヒリズム」と呼ぶもので、「少なくとも対象が存在しているように見える、という感覚器官から入ってくる情報を説明できない」（p. 211）という理由で却下されている。絶対的でないニヒリズムは、「像と呼ばれているものをつくりあげているおびただしい数の素粒子」（p. 208）の存在だけを認める。こうすることによって、構成のアンチノミーの結論「粘土のかたまりと像がどちらも同じひとつの物質からできている」（p. 209）に至らずに済む。ニヒリズムによると、もちろん、あなたや私も存在せず、素粒子があるだけである。

ニヒリズムの否定する存在テーゼは、前述の通り、内容特徴が成り立っていることと、対象が存在することを混同しているという点で問題がある。ニヒリズムも一種の物理的・還元論的視座であり、その視座に立てば、素粒子だけが存在するというのは間違いではないだろう。ただし、我々の心は、目に見えない素粒子だけに RF を対応させ、他の何ものにも RF を対応させないという働き方を普通はしないため、この議論はあまりに普段のものの見方から離れすぎている。従って、「否定するのはむずかしいが無視しても問題ない」（p. 210）という論評が出るのも無理はない。

また、ニヒリズムの視座は、人間の経験の領域を語りだすやいなや限界を露呈する。「いま私（もしくは、「私の形」に並んだ素粒子）は前を見ており、ある感覚を経験している。どうもそれは、コンピューターの画面を見るという経験らしい。だが、これとまったく同じ感覚は、「コンピューターの画面の形」に並んでいるだけの素粒子からも得られるだろう」（p. 209）とニヒリズムの立場から言われている。1つの形に並んだある素粒子群を見たことから、ある

1つの決まった感覚経験が得られる、ということにヒリズムは予想するだろう。しかし有名なアヒルウサギの絵（ルビンの壺でもよい）を見た際には、1つの形に並んだある素粒子群を見たことから、アヒルの絵を見るという経験もウサギの絵を見るという経験も得られることがある⁵。この事態は、素粒子以外の存在者を認めないヒリズム（や物質だけ説）の射程を超えているのではないか。人間の感覚経験を説明する場合には、どのようなRFを構築したかというようなことを問題にする認知的視座に立つことが有効である。我々のRFは、当然ながら素粒子に対応するものだけではなく、より豊かな経験を我々にもたらすものである。人は素粒子のみによって生きるのではない。

4.3 引き継ぎ説

引き継ぎ説は持続テーゼ「彫刻家がひとかたまりの粘土を像の形にしても、それによって粘土が破壊されることはない」を否定することで不合理テーゼ「別個の対象が、ひとつの時点において、ひとつの物質とひとつの場所を共有することは不可能である」を回避するものである。この説によると、粘土のかたまりを構成する粒子を彫刻家が像の形にすると、粒子の「支配権」が種〈粘土のかたまり〉から種〈像〉へと引き継がれる。この時、粘土のかたまりという対象は存在しなくなり、新たな対象である像が出現する。像がつぶされた時には逆に、粒子の支配権が種〈像〉から種〈粘土の塊〉に返還される。

1つの時点において粒子の支配権は1つの対象だけが持つことができる。一時点において、1種類のものだけが存在すると考えることは、物質だけ説、及びヒリズムと共通する点である。RFTの立場からは、既に述べたように、RFの内容特徴と、IDによって同一性を保証されるRF自体を区別していないという点で、人間の概念化から乖離した考え方であるように見える。（勿論、これらの説は人間の概念化についての理論ではなく、実在についての理論である。）内容特徴は1つのRFに複数あるのが普通であるから、像であることと粘土のかたまりであることは問題なく両立可能である。

4.3.1 支配的なカテゴリー化

引き継ぎ説が考えるように一時点において1つの種だけが粒子の支配権を握っているように通常思えるのだとしたら、1つの対象には普通1通りの支配的な、認知的に言えば最も喚起されやすいカテゴリー化があるのかもしれない。粘土のかたまりを像に成形したら、対象が像としてカテゴリー化されるようになる。つまり、〈aが像だ〉という内容特徴が前景化する。その反面、それまで前景化していた〈aが粘土のかたまりだ〉という内容特徴は背景に退く。RFはワーキングメモリにあり、同じIDのRFがワーキングメモリで構築される度に内容特徴は変化し得る。

確かに、最初から成形後の像を見た者の心のRFには、〈aが粘土のかたまりだ〉という内容特徴が一度もなく、そのようなカテゴリー化がされないこともあり得るだろう。しかし、構成のアンチノミーとの関連で重要なことは、2つの内容特徴は併存可能であることだ。「それは粘土のかたまりであり、かつ像であるか?」と問われた場合、〈aが粘土の塊だ〉という内容特徴はそれまで喚起されていなかったとしても、言語表現によって呼び出されるのである。このような場合、同じRFに2つの内容特徴を含めることは全く問題なくできる。それにも関わらず、引き継ぎ説のように持続テーゼ—そこでは粘土のかたまりも像もどちらも言語化されている—を否定することには無理が感じられるということになる。

粘土が像に成形されても、内容特徴〈aが粘土のかたまりだ〉が失われなければ、粘土が破壊されたとみなされるわけではない。像がつぶされた場合に関して、「構成している物質が存在し続けても、像はつぶされると存在しなくなる」(p. 204)というのも語弊がある。「像」と呼ぶことが適切でなくなるといふことと、「像」と呼ばれていた対象が存在しなくなることは別問題である。たとえば、岸田文雄が首相を辞めたら、「首相」と呼ぶことが適切ではなくなるけれども、彼が首相を辞めても、「首相」と呼ばれていた対象その人が存在しなくなるわけではない。

4.3.2 「どの種に属する対象が存在するかを定める規則」（p. 205）

引き継ぎ説には、対象はいつどの種に属し、いつどの種に引き継ぎが行われるのかを規定することが求められる。粘土像の事例については、「粒子の並びかた」（p. 204）が“主権者”で、それに応じて支配権が決まるとされている。他の場合についても主権者を定める必要があるのはもちろん、粘土像についても、なぜ粒子の並びかたが存在する種を決めるのか、他の可能性はないのかという疑問が残る。この点を論じるために、コニー&サイダーは、これまでのとは少し違う引き継ぎ説を支持する火星人を登場させている。その火星人は、対象が屋外にあるか屋内にあるかを粘土像の支配権の決め手とし、粘土のかたまりと像という種を認めない。つまり、次の2種の間で引き継ぎが行われると主張する（p. 205）。

外塊：屋外に位置する粘土のかたまりのこと。形はどのような形でもかまわない。

内塊：屋内に位置する粘土のかたまりのこと。形はどのような形でもかまわない。

彫刻家が正午にアトリエ小屋に粘土の塊を持ち込み、そこで2時に像を完成させ、4時に屋外に設置したとしよう。地球人の引き継ぎ論者によれば、引き継ぎが行われるのは2時である。つまり、2時までは粘土のかたまりが存在し、像は存在せず、2時からは像が存在し、粘土のかたまりは存在しない。この火星人によれば、それは誤りで、引き継ぎが行われるのは4時である。正午から4時までには内塊が存在し外塊は存在せず、外に運びだされた4時に内塊は破壊されて存在しなくなり、外塊が存在する。以下のようにまとめられる。

表 彫刻家と引き継ぎ論者達のタイムテーブル

時刻	彫刻家	地球人の引き継ぎ論者	火星人の引き継ぎ論者
正午	粘土の塊をアトリエ小屋に持ち込む	粘土の塊	外塊から内塊へ引き継ぎ
2時	像を完成させる	粘土の塊から像へ引き継ぎ	内塊
3時	アトリエで休憩	像	内塊
4時	像を屋外に設置	像	内塊から外塊へ引き継ぎ

しかも、火星人の引き継ぎ論者に言わせると、「そもそも粘土のかたまりも像も存在しない」とのことである。地球人の引き継ぎ論者は、最初から最後まで外塊も内塊も存在しないと反論することになる。なぜなら、どちらの引き継ぎ論者も、不合理テーゼ「別個の対象が、ひとつの時点において、ひとつの物質とひとつの場所を共有することは不可能である」を認めているからである。従って、3時には像が存在するなら内塊は存在せず、内塊が存在するなら像は存在しないということになる。3時に像も内塊もあったということはどちらの引き継ぎ論者も認めない。

我々地球人は、同郷の引き継ぎ論者の肩を持ち、少なくとも地球ではモノがどこにあるかは何が存在するのに関係ないのだと火星人に言いたくなるかもしれない。しかし、「地球でもホームランボールとファウルボールはどこにあったかで区別され、オークションでの値段も違いますよね」という火星人の言い分にも五分ほどの理がありそうだ。また、地球人の引き継ぎ論者は、たとえ火星人の論戦に勝ったとしても、別の基準を持つ金星人の引き継ぎ論者がやってくる前に、いつどの種が引き継ぐのかを教えてくれる一般規則を定めなければならない。それは簡単なことではないだろう。

視座俯瞰認知メタ形而上学の立場からは、どちらの引き継ぎ論者もおかしなことを言っていることになる。ここでも問題は、RFに複数含まれることが可能な内容特徴と、対象のRFそのものを混同していることである。問題の対象のRFが午後3時に〈aが像だ〉という内容特徴と〈aが内塊だ〉という内

容特徴を同時に持つことは全く問題がない。午後4時に〈aが内塊だ〉がなくなっても（あるいは、内容特徴の@が過去に変わっても）、RFは存続する。

もちろん、〈aが内塊だ〉や〈aが像だ〉という内容特徴がRFに入っているかどうかは概念化者の捉え方次第である。〈aが内塊だ〉は、地球人の心において屋内のモノに対応するRFに普通入っていないが、火星人の心においては、屋内のモノに対応するRFに入っている。粘土のかたまりを成形して像を作ってからそれをつぶした場面については、地球人の引き継ぎ論者は、像が無くなり、像ができるまで存在した粘土のかたまりが再び存在するようになったとする。しかし、成形前とつぶした後の粘土のかたまりは、普通全く同じ形ではない。それでも元に戻ると考えたとしたら、それはそう捉えたからに他ならない。究極の实在を捉えようとしている形而上学者が、实在の議論と捉え方の議論を厳密に区別できているのか、若干疑わしい（山泉 2020b も参照）。形而上学の議論において、实在の話をしているのか、捉え方の話をしているのかは、常に留意しなければならない。

RFT・認知形而上学によると、〈aは…だ〉という内容特徴が成り立っている場合には、「…が存在する」と言える。複数成り立っている場合は、喚起されやすい内容特徴の表現が用いられやすいのだろう。何が喚起されやすいかは、文脈中立的には決まらず、総理大臣も店に入ったら「総理」ではなく「お客さん」と言われることがあるだろう。では、どのような内容特徴（複数可）がRFに入っていて、より活性化するのだろうか。一般的には、認知的関連性の原理（スペルベル&ウィルソン 1995/1999）が成り立っていて、関連性の最大化に向けて働く認知システムの、個々の場面における働きによるとしか言いようがなかろう。認知システムがどう働くかには、火星では屋内にあるか屋外にあるかに注目するというような、文化的な要因も関与する。

もちろん、引き継ぎ論者にとって午後3時に像があるか内塊があるかは、単なる言葉の問題や、文化に影響された捉え方の問題ではなく、实在の問題である。従って、仮に我々が皆、「午後3時にアトリエ小屋にある内塊」のような言い方をしているとしても、地球人の引き継ぎ論者は、こう考えることにな

る。「もしわれわれがそうしていたならば、対象がいつ存在しはじめるか、いつ存在しなくなるかについて、われわれはほとんどいつもまちがった判断をするはめになっていただろう。なぜなら、正しい対象は粘土のかたまりと像であり、内塊と外塊ではないからだ」(p. 207)。引き継ぎ論にコミットしない者から見ると、地球人の引き継ぎ論者が内塊・外塊という種ではなく、粘土のかたまりと像という種を実在するものとして選んだのは、それが彼らの慣習に即しているからだとしか思えない。地球人の引き継ぎ論者は、「内塊と外塊の存在を否定して粘土のかたまりと像の存在を信じるのは、自己中心的だ」(p. 207)とか、「引き継ぎ説の種の選びかたは自己中心的すぎて疑わしい」(p. 214)という謗りを免れない。RFTは、内容特徴〈aが像だ〉と〈aが内塊だ〉を同じRFに共存させることが可能と説き、自己中心主義に陥ることはない。

4.3.3 存在論的範疇の不連続性

上述のソクラテスが死んだケースを引き継ぎ説は次のように扱う。「ソクラテスはもう存在しない。彼の体が腐敗したとき、種〈人〉の地位は種〈死体〉に引き継がれた。こうして、かつて存在していた人—つまり、ソクラテス—は存在しなくなったのである」(p. 204)。これは、物質だけ説の扱い—「人は体が腐敗して風化した後も存在することができる」(p. 205)—や、ニヒリズムの扱い—ソクラテスが生まれる前・生きている間・死んだ後において変わらず粒子だけがある—よりも直観になじみやすいだろう。

RFTはこのなじみやすさを次のように説明できる。生者ソクラテスの存在論的範疇は人であり、前述の通りモノと心(魂と言ってもよい)のドット事物であり、モノと心が別のIDを持ち得る。彼が死んでいる時、ソクラテスの魂は、彼が信じたように不死かどうかはともかく、少なくとも遺体とともに無いと思われている⁶。そのため、生者ソクラテス(モノID a・心ID b)とソクラテスの遺体(モノID a)とでは、対応しているRFの存在論的範疇が部分的に異なり、RFのデータの連続性が不完全である。そのため、我々は「ソクラテスが存在しなくなった」という考えを受け入れやすく、また、存在論的範疇

の変化は人から死体への“引き継ぎ”としても捉えやすい。一方、物質だけ説の扱いはと言うと、上で述べたように、来歴がソクラテス RF にまでたどることのできる粒子 RF が現実の実態において想定できなくはないので、そのような概念化は不可能ではない。しかし、そうすると心の面が無視される点で普通の概念化ではなく、不自然さがある。このように RFT は、認知的視座から、形而上学説の自然さを説明することができる。

4.4 共存説

これまでの説と対比しつつ共存説を導入する。彫刻家が作品を運んでいるとき、それは何かというと、物質だけ説によるとひとつかたまりの物質である。（地球人の）引き継ぎ説によると像である。ニヒリズムはどちらでもない主張する。共存説はどちらかを選ぶのを拒否し、両方だと主張する（pp. 212-213）。つまり、共存説は不合理テーゼ「別個の対象が、ひとつの時点において、ひとつの物質とひとつの場所を共有することは不可能である」を否定する。固体のモノについて、「複数の対象が同一の空間領域にいることも可能だ」（p. 212）というわけである。しかし、これを認めると、像と粘土の塊にはそれができるのに、電車で仕方なく立っている私と、私の前で座れている人は、なぜ同じ場所に座ることができないのか？という問題に答えを用意しなければならない。つまり、非貫入性（impenetrability）の原理「二つの異なる物質的对象が同じ時点でまったく同じ空間を占有することはできない」（倉田 2017: 5）とどう折り合いをつけるかが問題となるということである。これが難問かはともかく、共存説も、粘土のかたまりと像を同じ RF の 2 つの内容特徴ではなく別個の対象と考えている。RFT・認知形而上学の立場から言わせれば、これが問題を引き起こしている。そのように考える説は少なくないが、「粘土の塊」と呼べれば粘土の塊が存在し、「像」と呼べれば像が存在する、と想定するのは、言葉に引きずられすぎである。言語から独立した概念構造を考える RFT はこの点で解毒剤となり得る。

直観的には、複数の対象が 1 つの時点において 1 つの物質と 1 つの位置を共

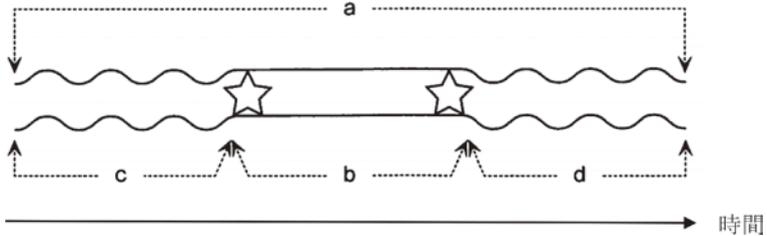
有することは端的に不可能である。RFT の用語で言うと、複数の RF (ID a、ID b とする) が、いずれも存在論的範疇がモノ (特に固体) である場合、ID a の RF に内容特徴〈a が位置 p にある〉 (@時点 t) があり、ID b の RF に内容特徴〈b が位置 p にある〉 (@時点 t) があるということだが、RFT の規則としてこれを禁じる規則を設ける必要はない。ただ、我々はこのような概念構造の状態を現実において成り立たないものとみなす。このことは、認知形而上学的事実だろう。

共存説への反論として、コニー&サイダー (2005/2009) は以下の指摘をしている (p. 213)。像と粘土のかたまりは、同一の並びの同一の物質できているから、物理的性質も同一であるはずだ。しかし、同じ位置を占めるこの2つの対象に一齐に同じ圧力を加えるとどうなるだろうか。共存説によると、粘土のかたまりは残るのに、像は破壊される。像は粘土のかたまりよりも脆いということになる。この一見当たり前のこと―「異なる種に属する対象が異なる存続条件をもちうる」(倉田 2017: 11) は、両者の物理的性質が同一であるということと矛盾する。この問題も、粘土のかたまりと像を別個の対象と考えているから起こるのである。RFT の立場からは、圧力をかけたとき、対象である像が破壊され、存在しなくなったと考えるのは誤りで、内容特徴〈a が像だ〉が成り立たなくなっただけである。内容特徴の存続条件は当然、様々である。

共存説へのもう1つの反論として挙げられているのは、「二つの対象がまったく同じ部分によって構成されているというまさにその考えは、部分の概念と衝突している」(p. 213) ということである。同時点・同地点に存在する像と粘土のかたまりは、全く同じ部分から成る異なる全体である。これは可能なのだろうか。「全体が部分の集まったもの以外の何ものでもないのなら、同じ部分が二つの全体を成すことはありえない。もし二つの全体があるのなら、どちらか (あるいはどちらも) が部分の集まったものとは別のものでなければならない」(p. 214) のではないか。このような問題も、粘土のかたまりと像を別個の対象と考えない RFT による分析では生じない。

4.5 四次元主義

最後の四次元主義は、コニー&サイダー（2005/2009）で擁護されているものである（構成のアンチノミーが論じられている章の筆者は『四次元主義の哲学』の筆者サイダー）。サイダーは、共存説を受け入れつつ、四次元主義をとることによって共存説への反論を退けている。四次元主義は、対象はモノであっても空間的部分に加えて時間的部分も持つとする。時間的部分という概念が把握し難い場合は、イントロ、1番、間奏、2番、アウトロから成る歌を思い浮かべられたい。同様に、たとえば人も、「時間的部分と空間的部分の両方をひとまとめにした部分すべてから成る」（p. 216）と考える。粘土のかたまりと像に関して言うと、像はかたまりの時間的部分を成すとされる。かたまりは下図（p. 217に時間を表す矢印を追加）のa、像はbに対応する。像が存在するbの間もかたまりは存在しつづけているとされる。以上を踏まえて、「粘土のかたまりと像は、あなたとあなたの手の場合とまったく同じように、別個の対象」（p. 216）とする。このことで、四次元主義者は構成のアンチノミーの結論—彫刻家は像を作り終わった後には二つの対象、つまり、像とひとかたまりの粘土を握りしめている—を受け入れることを正当化する。



なお、RFT では、手は別個の RF を獲得し得るため、手を体全体と関連付けられる別の対象として扱うことが可能である。また、〈a が像だ〉と〈a が粘土のかたまりだ〉で成り立っている時間が異なっていることは、内容特徴ごとの @ で捉えられる。前者が成り立っている時間は後者が成り立っている時間に含まれる。こうして粘土のかたまりと像の間に成り立つ時間的包含関係を RFT

は捉えることができる。もちろん、我々が四次元主義を理解できるということは、四次元主義的な概念化—モノを歌のようなプロセスとして捉える概念化—もできるということである。

粘土のかたまりと像は、時間的部分が同一ではないから、当然、異なる全体を成すことになる。四次元主義はこうして、共存説への2つ目の反論—同一の部分から成る異なる全体の問題—を退ける。「内塊」「外塊」は、粘土のかたまりの別の時間的部分の集まりに対して使われる言葉であり、そのような時間的部分の集まりも、「われわれがよく知っている粘土のかたまりや像とまったく同じように実在する」(p. 220)と四次元主義者は主張する。当然ながら、四次元主義者は、他の時間的部分の集まり、「c塊」「d塊」等々(上図参照)も実在すると認めなければならない。概念化されたものは存在する(とみなされる)、とRFT・認知形而上学の基本に沿って考えれば、内塊や外塊などは不自然な概念化であるために存在すると考えがたいということと、それでも考えられることが説明できる。

サイダー(2001/2007)で本格的に展開されている四次元主義の哲学をここで検討する用意はないが、倉田(2017: 23-24)は四次元主義に対して、像を粘土のかたまりの時間的部分とするのは、両者の関係の適切な記述なのかという疑問や、存在するものは粘土のかたまりだけで十分で像はその時間的な一部に与えられた便宜的なラベルにすぎないとするのは、「芸術家が粘土の塊から像を拵えることによって、それまで世界に存在しなかった対象が新たに生成するという直観(「創造テーゼ」と齟齬をきたす」という所見を述べている。この点についてのRFT・認知形而上学の立場からの見解は4.1で述べた。

また、四次元主義によると、粘土のかたまりとその時間的部分である像について、「彫刻家が直接握りしめている対象はひとつしかない。粘土のかたまりと像が共有しているその時点での時間的部分だ。粘土のかたまりそのものと像そのものは、彫刻家が直接握りしめている時間的部分をもっているということを通じて、間接的に握りしめられているだけなのだ」(pp. 218-219)とのことである。厳密に考えれば、空間的な直接性・間接性と時間的な直接性・間接性

がどちらも関与しているはずである。どうやら、部分と直接インタラクションすることで全体と間接的にインタラクションするということのようなのだが、四次元主義ではない多くの人にとっては、直接・間接という区別は非常に難解だろう。

RFT では、直接・間接の区別を考える必要はない。〈a が像だ〉と〈a が粘土のかたまりだ〉がどちらも成り立っている RF に対応する対象を握りしめているというだけである。空間的部分についても同様で、あなたの空間的部分である鼻が触られている場合、触れられているところは、あなたの鼻 RF にもあなた RF にも対応し得るというだけである⁸。日常的視座を扱う特殊認知形而上学と RFT が採用する三次元主義の説が「われわれの日常的直観に沿」い（倉田 2017: 24）、多くの読者にとって四次元主義よりもずっと自然で抗し難いもの（Scholl 2007: 583）だとしたら、三次元主義が四次元主義よりも、我々の物質的对象の概念化の仕方にずっと近いものであるからだろう。

5. おわりに

前節で検討した5つの形而上学説は、ニヒリズムを例外として、何が対象として存在するかについての明確な規準がなく、その点でどれもアドホックと言わざるを得なかった。RFT では、対象の individuation（何が1つの対象か）の規準と、対象はいつできるのかについて、理論に基づいてアドホックではない一貫した答えを提示している。RF1 つに対応するものが1つの対象であり、概念世界の対象は、新規 ID をもって対応する RF ができることによってできるということである。形而上学の側からは、それでは、人間は何を対象とみなすのか？という問い（田中太一、p.c.）が返ってくるだろう。構成のアンチノミーについて正面から答えるならば、もちろんこの問いに答えなければならない。世界の一部を1つの対象とみなすという認知も進化の産物で、この認知の詳細は経験的問題である。この問題に答えるには、RFT・認知形而上学だけでなく、認知科学との共同研究が必要だろう。RFT は、対象とは何かという問

いに対する概念的な答えを与えたいにすぎない。

「構成のアンチノミーの解決案はどれも、何か驚くべき特徴をもつ運命にある」(p. 220) とコニー&サイダー (2005/2009) は述べている。サイダーの支持する四次元主義も、「物質的対象に関する日常的信念の大きな変更を迫る」(倉田 2017: 20) ものであり、時間的部分という常に「パッとあらわれてパッと消える瞬間的対象なんてものが存在する」(コニー&サイダー 2005/2009: 220) ということがにわかには受け入れがたい。RFT・認知形而上学の分析にも日常的視座からは驚くべき前提があるかもしれないけれども、粘土のかたまりと像を別個の対象として認めずに、同じ対象に対応するRFの2つの内容特徴として扱うということは、他の説の特徴や帰結ほど驚くべきものではないだろう。これによって構成のアンチノミーの問題の多くを回避することができるのであれば、理論的代償があったとしてもそれに見合うよりも大きな理論的利点があると筆者は考える。

もっとも、何度も述べてきたように、検討してきた5つの形而上学説は、いずれも実在世界がどのようなものであるかを論じているという点で、我々の概念化の結果現れる概念世界を対象とする認知形而上学と同列に並べるべきものではない。その点で、本稿で主に行ったのは認知的視座からのメタ形而上学的な考察である。他の形而上学の問題に対しても、認知的視座からのメタ形而上学的考察は新たな光を投げかけるだろう(普遍論争については、山泉 2020bを参照)。認知形而上学のように形而上学の実在論を否定することは、一部の形而上学者にとって神の視点('God's-Eye' point of view)を否定することになる(Haukioja 2020: 67)。その視点からは我々の概念体系と独立に、世界と世界についての理論・信念とを比較できるはずだった。彼我の視座の相違に自覚的で、概念化の基礎を提供するRFT・認知形而上学は、神の眼を持たざる我々に最善の代替物をもたらすのである。

* 本稿は、文部科学省の科学研究費(課題番号: 17K17842、22K00553)の助成を受けて行われている研究の一部である。本稿の内容を授業で扱った際にコメントをくれた受講者達に深く感謝する。

〔注〕

- 1 ジャッケンドフ（2012/2019: 209）は、メタ形而上学はこの第三の可能性を探求していないと述べているものの、Bliss and Miller（2020: 1）の冒頭において4つ目に挙げられている立場—形而上学の答えは実在の究極の本性よりも我々が採用する概念スキーマを明らかにする—はこれに相当すると考えられる。なお、もう1つの立場は、形而上学は意義のある問いを発しているものの、重要な役目は経験科学に引き継がれたというものである（p. 1）。
- 2 〈□が像である〉や、〈□がリングである〉とはどういうことかは、確かに意味論の問題ではあるけれども、基本的に語彙意味論の問題であり、RFTの射程を超えていると言わざるを得ない。
- 3 ジャッケンドフ（2012/2019）は、「世界に正真正銘実在するものが何なのかについては、たぶん理論物理学のやるべき仕事だろう」（p. 216）と述べている。
- 4 実際、知覚の実験において、モノが分裂した場合に認知的処理コストがかかること、そのコストは object file が2つの object file のコピーに置き換えられたことを示唆することが Scholl（2007: 578）で述べられている。同論文では、テセウスの船の同一性についての、object file の観点からの考察（p. 584）もあり、視座俯瞰認知メタ形而上学を先取りしていると言える。なお、対象AがBとCに分裂した場合、AとB、AとCは同一とみなすことが可能だが、BとCは同一とみなしがたい。RFTでは、「<」の記号に上の関係を表すという意味を込めて、ID a のファイルが ID b < a のファイルと ID c < a のファイルに分裂したと分析できよう。
- 5 アヒルウサギの絵の知覚像のRFには〈aがアヒルだ〉と〈aがウサギだ〉という内容特徴を同時に入れることはできないだろう。絵そのもの（とは何かも問題ではあるが）のRFには2つの内容特徴〈aがアヒルの絵だ〉と〈aがウサギの絵だ〉を同時に入れることができるが、知覚像のRFとは存在論的範疇が異なる。
- 6 意味飽和やゲシュタルト崩壊と言われる現象では、形・意味のドット事物である表象の後者が無くなっていると考えられる。
- 7 存在論的範疇がモノでなければ、全く同じ部分からなる別個の全体が複数あり得るのかもしれない。例えば、仲良しの一郎・二郎・三郎・四郎がバンドと勉強会を作ったとする。両者は（人の）集団という存在論的範疇（ONT {人}）に属す別個の対象である。勉強会はすぐに解散し、存在しなくなったけれども、バンドは長く続くということがあり得る。夫婦の漫才コンビが離婚しても、漫才コンビが存続する場合も同様である。このことから、全体は必ずしも部分の総和ではないと言えるのだろうか？ それぞれの集団の部分として、構成員だけでなく、構成員間の活動目的についての合意や構成員間の関係性も含めるのであれば、同じ部分が2つの異なる全体を成す例とは言えない。部分として何が認められるかが明確に規定されなにかぎり、全体は必ず部分の総和であるかどうかは決められないだろう（田中太一、p.c.）。

- 8 とは言え、鼻 RF とあなた RF をどう関係付けるかという問題は、まだ詳しく検討されていない。

[参考文献]

Balcerak Jackson, Brendan

- 2020 “Verbal disputes and metaphysics”, in Ricki Bliss and J. T. M. Miller (eds.), *Routledge Handbook of Metametaphysics*, Routledge, London, 118-129.

Bliss, Ricki, and Miller, J. T. M.

- 2020 *Routledge Handbook of Metametaphysics*. Routledge, London.

Culicover, Peter W. and Jackendoff, Ray

- 2005 *Simpler Syntax*. Kindle edition. Oxford University Press, Oxford.

Gibbard, Allan

- 1975 “Contingent identity”, *Journal of Philosophical Logic*, 4, 187-221.

Haukioja, Jussi

- 2020 “Metaphysical realism and anti-realism”, in Ricki Bliss and J. T. M. Miller (eds.), *Routledge Handbook of Metametaphysics*, Routledge, London, 61-70.

Scholl, Brian J.

- 2007 “Object persistence in philosophy and psychology”, *Mind & Language*, 22 (5), 563-591.

Yamaizumi, Minoru

- 2019 “A cognitive-pragmatic account of specificational sentences”, Poster presentation at International Cognitive Linguistics Conference 15.

倉田剛

- 2017 『現代存在論講義 II』新曜社，東京。

コニー，アール・サイダー，セオドア。小山虎訳

- 2005/2009 『形而上学レッスン』春秋社，東京。

サイダー，セオドア。中山康雄監訳

- 2001/2007 『四次元主義の哲学』春秋社，東京。

ジャッケンドフ，レイ。郡司隆男訳

- 2002/2006 『言語の基盤』岩波書店，東京。

ジャッケンドフ，レイ。大堀壽夫・貝森有祐・山泉実訳

- 2012/2019 『思考と意味の取扱いガイド』岩波書店，東京。

スコット＝フィリップス，トム。畔上耕介・石塚政行・田中太一・中澤恒子・西村義樹・山泉実訳

- 2015/2021 『なぜヒトだけが言葉をはせるのか』東京大学出版会，東京。

スベルベル，ダン・ウィルソン，ディアドリ。内田聖二・宋南先・中達俊明・田中圭子訳

1995/1999 『関連性理論』（第2版）研究社，東京。

山泉実

2020a 「指示参照ファイル理論序説」『日本語・日本文化研究』30, 1-28。大阪大学言語文化研究科日本語・日本文化専攻。

2020b 「認知的視座からの意味論と形而上学」『日本語・日本文化研究』30, 29-52。大阪大学言語文化研究科日本語・日本文化専攻。

2021a 「潜伏疑問名詞句再考」『言語文化研究』47, 101-121。大阪大学大学院言語文化研究科。

2021b 「変項名詞句の階層を再考する」『東京大学言語学論集』43, e49-e75。

2022 「潜伏命題名詞句再考」『基礎言語学研究』1, 1-37。

近刊 「名詞句の自由拡充再考」『科学哲学』55 (2)。

Towards a perspectival cognitive metametaphysics: On the antinomy of constitution

Minoru YAMAIZUMI

This paper discusses the antinomy of constitution, a long-debated conundrum in metaphysics, from the perspective of perspectival cognitive metametaphysics, as an application of cognitive metaphysics and Reference File Theory (RFT), a theory of mental representations that can be expressed by noun phrases.

Following Conee and Sider's *Riddles of Existence*, I first introduce the antinomy of constitution, which can be described by the following example: "If you hold a clay statue in your hand, you are actually holding two physical objects, a statue and a piece of clay. For if you squash the statue, the statue is destroyed but the piece of clay keeps on existing" (p. 5). Here are four underlying assumptions of the antinomy: "Creation: The sculptor really does create the statue—that is, the statue did not exist before the sculptor sculpted it. [...] Survival: The sculptor does not destroy the quantity of clay by forming it into a statue. Existence: There really are such objects as statues and pieces of clay. Absurdity: It is impossible for two different objects to share the same matter and spatial location at a single time" (p. 138).

Next, I briefly introduce RFT and cognitive metaphysics. Cognitive metaphysics explores not ultimate reality but the world as conceptualized. From a Jackendovian cognitive perspective (Ray Jackendoff, *Foundations of Language*), we push "the world" into the mind and consider what a speaker refers to using a noun phrase as an entity in the world as conceptualized; in language users' mind, such an entity corresponds to a reference file (RF). The data structure of RFs has the following

four features: ontological category, ID, position, and content features. In RFT, these features account for the semantic diversity of noun phrases and also represent the model of cognitive metaphysical entities.

As a preliminary consideration of the following meta-analysis of existing theories of the antinomy of constitution, I examine the four assumptions above from the perspective of RFT and cognitive metaphysics. Survival and Absurdity, basically, have no issues, but Creation and Existence Absurdity must be interpreted with caution. Importantly, from the RFT/cognitive metaphysics viewpoint, watching a sculptor make a statue out of clay urges the conceptualizer to add the content feature <a is a sculpture> to the RF of the erstwhile lump of clay, but not to tailor an RF with a new ID. Therefore, it is incorrect to say that a new entity begin to exist when the sculptor has made a statue, since it does not correspond to a new RF but to a pre-existing RF with a new content feature. Not distinguishing between content features and RFs themselves (or their IDs) mainly causes difficulties for existing theories of the antinomy.

RFs and their data structure provide cognitive foundations, by means of which we conceptualize entities. With this framework, I compare and analyze the five theories presented by Conee and Sider (i.e., just-matter theory, take-over theory, nihilism, cohabitation theory, and four-dimensionalism) together with their underlying perspectives, and hence, perspectival cognitive metametaphysics.

